
押し入れの異世界（外伝）

コスモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押し入れの異世界（外伝）

【Nコード】

N4835Z

【作者名】

コスモス

【あらすじ】

押し入れの異世界のその後を描いた、外伝です。

基本的に、主人公を各個人に変更して、三人称で書いてみました。本編より、ギャグ要素は超控え目で、つまらないかも。

でも、良かったら読んでみてください。

(閑話) ある日のノーマ・アレハンドロ (前書き)

基本的に一話完結にする予定ですが、そのせいで、不定期更新になりますのでご了承ください。

その代わり、一話が、従来より長めになっています。

（閑話）ある日のノーマ・アレハンドロ

きっかけは、地元の農民からの通報だった。

それは、メンデルホル山とソレル川に挟まれた難攻不落の要塞、ラビン砦から馬で2時間程の国境線に、ナーヴァル皇国の兵隊が築城を始めていると云うものだった。

位置的にはグランバル王国とも云えるし、ナーヴァル皇国とも云えるギリギリのところだが、少なくとも、その建築中の砦が機能を始めれば、グランバル王国の領土が不当な支配を受けることは確実である。

実際、その位置は、グランバル王国に所属する村から目と鼻の先にある“発見されても構わない。来るなら来い”とでも云わんばかりの、いわば暴挙であり、あからさまな挑発行為だった。

ラビン砦を守るブラツケン・ランド騎士団長は、直ちに斥候を派遣して、築城の規模や人員を確認したうえで、指揮下の騎士団三千のうち、二千を派遣して直ちに蹴散らすよう命令した。

この時はまだ、築城に参加しているナーヴァル皇国の兵員はおよそ千程度と視られ、味方の被害を最小限にするためにも、動員可能な全兵力を速やかにぶつけることにしたのだ。

しかし・・・

「事実なのか？」

「はい、陛下。ナーヴァル皇国軍が兵力五千を持って国境を超えませんでした。ラビン砦の騎士団は姦計に嵌り、およそ二千を喪失。現在、残存兵力のみで砦を死守している状態です」

「どのくらい持ち応えられる？」

「は、持って三週間ほどかと・・・」

「討伐軍を・・・派遣せねばなるまいな」

グランバル王国の中枢において、国王と宰相コラン伯爵との間で交わされた会話は、その日のうちに王宮から流れ出て、各地の貴族領主に伝わった。

長らく戦の無かったグランバル王国において、久しぶりの戦である。戦場で手柄を立て立身出世を狙う者、戦争で何らかの利益を得ようとする者、そして、宮廷での影響力を強めようとする者達の暗躍が始まった。

それから七日後、グランバル国王の前に討伐軍の指揮官達が顔を揃えていた。

ゼバン侯爵軍千百、ヘスス男爵軍五百、その他の領主軍二千、旧マツカーシー領の騎士団から三千、最後に近衛第十三番隊五十の総勢6650名の討伐軍が編成された。

更に、冒険者ギルドからは、千五百名程が、すでに先遣隊として出発している。

この編成には僅か七日の間で紆余曲折があった。

討伐軍の総大将として名乗りを上げたゼバン侯爵は、かつてクリント・フォン・ウォーカー前宰相の後釜と目された人物で、コラン伯爵がいなければ確実に宰相になっていた筈の有力貴族だった。

これについては、前宰相の強い推薦があり、任命権が国王にのみにあったことからコラン伯爵が宰相の地位に就いたが、当時から不満を抱え込んでいるのは確実だった。

しかし、今回の討伐軍の編成にあたって、どこをどう抑え込んだのか、総大将に名乗りを上げ、他に推挙する貴族達はいても、並び立

つ立候補者がいなかったため、云わば、消去法で総大将に任ぜられることになった。

いかに国王であっても、立候補者以外の者から総大将を指名することは憚られたのである。

「ゼバン侯爵に討伐軍総指揮官を命ずる。直ちにラビン砦に赴きナーヴァル皇国軍を撃退せしめよ」

「ははっ！必ずや、につくきナーヴァル皇国軍を撃退してお見せしましょう」

こうして討伐軍は王都を出発、強行軍で五日を掛けて戦地に到着した。

しかし、メンデルホル山とソレル川に挟まれた狭隘な地形に、ラビン砦を包囲したナーヴァル皇国軍を見たゼバン侯爵は直ちに攻撃を命じた。

「お待ちください侯爵閣下！見た所、敵軍はおよそ四千、以前の報告より千も少なく、伏兵の可能性があります。ここは先行していた冒険者の部隊と連絡を取り、情報を集めてから攻めるのが上策と考えます」

ここに来て進言したのが、近衛第十三大隊隊長のノーマ・アレアンドロだった。

ノーマは、他の諸将と異なり、冒険者の力を高く評価しており、その冒険者の部隊が全く姿を見せていないことに疑問を感じていたのだ。まして、強行軍によって到着した兵士達は、疲れきっており、今がチャンスと解つていても、せめて半日の休養が必要だと思つていた。

「おお、近衛のノーマ殿か。心配あるまいよ。敵は伏兵があったとしてもたつたの干程であろう？敵の主力を全軍で持つてすり潰せば、どうと云うことのない数だ」

「しかし！」

「あいや！判った！そこまで心配めさるなら、近衛は後方で伏兵を警戒してください。マツカーシー領から第一軍千を貴官に預けるゆえな」

実は、ゼバン侯爵にとってノーマの進言は渡りに船だった。

旧マツカーシー領の三千の兵力のうち千を引き渡すことになったが、伏兵に備えた予備軍として後方に置けば、例えば実際に伏兵がいたとしても、それで撃退出来る筈だし、近衛に正面に出られては手柄を奪われる恐れがあった。

ゼバン侯爵の頭には、既にこの戦いの後のことしかなかったのだ。勝利を土産に凱旋し、王宮内での発言力を増すこと、最終的にはコラン伯爵を追い落とし、本来自分のものであった宰相という栄光の地位を、奪い返すこと、それだけだった。その為には、近衛に活躍されては困るのだ。

実は、近衛第13大隊の出陣を要請したのはゼバン侯爵自身だった。

旧マツカーシー領の兵士達が出陣するにあたっては、政治的な問題があった。

まず、マツカーシー大公殿下が回復困難な病の床にあって、領地の支配が不可能になり、いずれ王室に領地が返還されることが決まっていた。

つまり、その領地の部隊は、実際には王室直属と云って良く、この無言の主張として近衛が参戦することが、先に決まっていた。

しかし、近衛が最も大きな部隊と共に参戦すれば、その活躍は王室に帰属することになる。

だからこそ、ゼバン侯爵は敢えて“第13大隊を”と願い出たのである。

理由は二つ。

まず、第13大隊は現宰相のコラン伯爵が創設した部隊であり、定数僅か50名の騎兵で、しかも大隊長は女。いかようにも御しやすいと思われた。

次に、何ならかのミスでも犯してくれたなら、それでコラン伯爵責任を追及できる。それだけで、コラン伯爵に傷を付けて宰相の地位を奪うことはできないにしても、材料は幾つあっても困らないと思っただのだ。

慌ただしく行われた軍儀では、結局、ノーマの意見は殆ど無視され、ゼバン侯爵の子飼いであるヘスス男爵などからは、厭らしい視線で全身を舐めまわされた挙句“後方でお暇でしたら私めが幾らでもお相手して差し上げますぞ？ぐふふふ”と笑われる始末だった。他の貴族達も似たり寄つたりの反応だった。

女に活躍されては、彼らの立つ瀬がないというのが本音だったのだ。

ノーマはこの討伐軍の中でも目立っていた。

40歳近い年齢ながら、190センチの長身と、赤い髪に加え、歳を取るのを忘れたと囁かれる程の美貌とプロポーションを維持して、肌もまるで20代の娘のようだった。

進軍の途中においても、ノーマのあるところ、常に、好奇とねっとりとした視線には困ることがなかった。

「サイモン！直ぐに、第一軍を率いて後方下がる。準備しろ。キャンベル！お前は周囲の偵察に出る。無理はしなくていいが、できれ

ば先行していた筈の冒険者の部隊と接触して情報を集める。第一軍からも騎兵を選抜してよい」

「はッ！」

ぱぱーん！ぱぱーん！ぱぱーん！

「ばかな！出撃ラツパの合図だと？早すぎる！足並みも揃っておらんではないか」

それから僅か15分後には両軍がラビン砦の前で激突した。

総兵力は味方が有利だったが、ナーヴアル皇国軍は防護に徹して、これを良く防いだ。しかも、味方は数が多いと云っても、最初に旧マツカーシー領の第二・第三軍を無秩序にぶつけて、他の部隊でその隙を付いているだけで、完全な力押しに過ぎず、もともと強行軍で疲弊していた兵士達の動きは鈍かった。

四千対五千五百の戦いは、ゼバン侯爵の期待とは裏腹に膠着の様相を呈し、ローマの不安が的中することになった。

「隊長！大変です！たった今帰って来た斥候からの報告です。近くの村に潜んでいた冒険者が見つかりました。それによると、ナーヴアル皇国軍の総数は・・・およそ一万！」

「なんだと！！では、残り六千は何処に居る??？」

「解りません。ですが、その冒険者によると、彼らがラビン砦に到着した時は、千五百の彼らに対して、5千の部隊が襲いかかってきてあつという間に壊滅したそうです」

慌てて地図に駆け寄り、地形を確認する。

六千もの兵力を隠せる場所が何処にあるのか？左は川、右は山。どちらも無理だ。

魔法で隠しているのか？いやあり得ん！どんなに優秀な魔術師でもそれは無理だ。

とすると・・・しまった！そう云うことか！！！！

ノーマは地図が広げられた簡易テーブルを激しく叩いた。

「キャンベル！侯爵閣下に伝令だ。“敵の総数は一万と判明。残り六千は、恐らく・・・ラビン砦内に伏せているものと思われる”以上だ！ああ、それから、撤退を進言すると伝えてくれ。サイモン！全員を騎乗させる。恐らく、ここにも敵が来るぞ」

「「はッ！」」

その頃、ゼバン侯爵は勝利を確信していた。

多少、手古摺ったものの、ナーヴァル皇国軍はじりじりと後退して、ラビン砦との挟撃が完成しようとしていたからだ。

このまま、砦の城壁からの弓矢の射程に入れば、一気に勝負は決まる。

「注進くん！注進くん！近衛第十三大隊ノーマ大隊長より注進です。敵は・・・」

「なんだと！そんなことはあり得ん！何かの間違いだ。見ろ！勝利は目前ではないか！」

その時、ラビン砦の城門が開かれ、中から大量の騎兵が飛び出してきた。

明らかに友軍ではないその衣装は、ナーヴァル皇国軍の誇る重装騎兵の大軍団だった。

それと同時に今まで後退を続けていた敵軍も一斉に反転し、攻勢に移った。

満を持した魔法の一斉射で、最前線にいた旧マツカーシー領の第二

ることにした。

猪突猛進して味方を壊滅させたゼバン侯爵を守ることに、部下の多くは不満を抱いたが、“その指揮下にある兵士達まで、怨むことはないだろう”というノーマの言葉で、気持ちを改めた。

その後、逃げる途中の騎士を吸収しつつ、余分な馬には怪我人に乗せ、歩兵と共に別ルートで王都を目指すように命じたが、ノーマは追撃して来る部隊を一撃する必要に迫られた。

ここから先は平原が広がり、追撃してくる騎兵から逃げる歩兵たちが丸見えで、とても逃げ切れないと判断したからだ。

しかし……

「敵襲！右前方に軽騎兵およそ千！」

「……やはり、伏兵もいたか……」

会戦で勝利し、退却する敵を効率的に撃破するには、退却する敵の脱出ルートに伏兵を置き、追撃部隊と連携して殲滅するのが最も効率的である。

ナーヴァル皇国軍も当然そうしたのである。

しかも、伏兵が発見されるのを恐れて、こんな遠くに。

「ふん！やることは変わらん！戦闘用意！右前方の敵を蹴散らした後、直ちに反転。後方の重装騎兵を迎え撃つ！全軍突撃！！！」

「……」

無茶な命令だった。

そんなことは不可能だと、ノーマも、それに従う全ての騎士達も悟っていた。

ここで皆死ぬのだと理解した。

それでも・・・それでも、まあ、良いか？と全員が思った。
この女騎士と一緒になら、あの世でも面白い戦が出来そうだ・・・

ノーマは馬を駆って先頭を走り、自慢の大剣で次々に敵を斬った。
時々、打ち込まれる魔法の攻撃は、とある小さな恋敵が多重掛けしてくれ
た防護魔法の甲冑で、難なく受け止め、散々に暴れまくった。
漸く、千の敵騎兵を撤退に追い込んだとき、ノーマの周囲には八百
程の騎兵が残るのみとなっていた。

全員が満身創痍で、ノーマ自身も幾つかの傷を受け、敵の返り血で
全身を赤く染めていた。

流石に息を切らし、動きの止まったノーマ達の前に、重装騎兵千八
百を中心に軽騎兵二千が現れた。

「ず・・・随分と・・・高く、評価された・・・ものですね・・・
隊長」

「そう・・・だな。なかなか・・・豪華な・・・敵だな」

「は・・・は！・・・全く・・・ですな！」

ノーマの周りを見たことも無い騎士達が集まり、こんな状況なのに
笑っていた。

その目は“敵に不足なし、死ぬには良い日だ”と語っていた。

そして、遠くに見えるナーヴァル皇国軍が、最後の突撃を開始した。

「さて・・・もう少しだけ、時間を稼ぐ・・・必要がある・・・
では、諸君？毎度同じ命令であいすまないが、密集隊形だ・・・全
軍突げ・・・」

ピピッ！ちゅどおおおおおん！

ピピッ！ちゅどおおおおおん！

ピピッ！ちゅどおおおおおん！

「ノーマ？そんなに私は頼りないかな？助けて欲しい時は、一言“助けて”と云えば良いと思うよ？」

「同感だわ！何よ！カツコつけて！」

「うむ。あそこに敵が固まっているな・・・ふんッ！」

突撃中の敵重装騎兵が、大音響と共に次々に吹き飛び、天高く舞い上がって行く。

飛来する無数の魔法攻撃は、八百騎の騎兵をすっぱりと包みこむ大規模防護結界の外側で空しく弾け、唯一集団を維持していた敵の重装騎兵の一団に、白い何か飛び込んでいくと、銀色の長大な斬光が閃き、一瞬で、百を超える重装騎兵達を切り刻んだ。

啞然とするノーマの視線の先に、ちよつと困った顔で笑う“黒髪の魔術師”が立っていた。

後に、グランバル王国では、この戦いを“ラビン砦の殲滅戦”と呼ぶようになる。

ラビン砦を失い被害は甚大、戦そのものは負けであったにも関わらず、まるで、勝利したかのような名称が付けられたのには理由がある。

風の旅団のメンバー三人の参戦があつたとはいえ、この戦いでナーヴァル皇国軍は、およそ五千の兵力を完全喪失し、砦を放棄して撤退したのである。

もともと、小国であるナーヴァル皇国の総兵力は僅か三万。

他国からの侵攻を防ぐ国境警備兵と、皇都防衛に必要な最低限の兵力を除いた、まさに全兵力を動員した、限定的グランバル王国侵攻作戦は、兵力の過半数を失う結果に終わった。

その結果、要するに、被害が大きすぎて、ラビン砦を維持するための兵力が、捻出できなくなってしまったのだ。

無理に維持しようとするれば、寡兵しか置けず、グランバル王国に直ぐに奪還されてしまうし、グランバル王国の攻撃に備えて五千規模の兵力を置けば、後方予備軍も含めて兵力が足りず、他国の侵攻に耐えられなくなるのだった。

一方、一目散に逃げ帰ったゼバン侯爵達は、ノーマ達を襲った軽騎兵に襲われ、完全に壊乱し、ゼバン侯爵は精鋭騎士数百だけになって、命からがら王都に逃げ帰っていた。

ヘスス男爵はあっさり敵兵に打ち取られ、死亡が確認されている。

グランバル国王の前で、ゼバン侯爵を弁護する貴族は、最早、一人も居なかった。

侯爵は最初、討伐軍敗退の原因を、冒険者達や、予想外に砦が早く落ちていた事、そしてナーヴァル皇国の総動員兵力の多さにある、と主張した。

しかし、何とか生き延びた領主軍の指揮官達から、ノーマの進言を無視した事実や、部下を見捨てて一早く逃げ出したことが報告されると、完全に言葉を失った。

まして、その二日後、近衛第十三大隊が敗残兵を收容しつつ、実に二千数百もの兵士達を引き連れて整然と帰還した時には、ゼバン侯爵は、もはや、外を歩くこともできないありさまで、国王の沙汰を待つと称して領地に引き籠った。

そして、敗軍の将とはいえ、ノーマにだけは国王から“将”としての報償が与えられ、ノーマはその席で、報償の返上と共に、第十三大隊の整備充実を進言して国王の裁可を得たのだった。

ちなみに、風の旅団は・・・

この戦いで、二つ名を得たのは、意外なことに魔術師の少女だった。八百騎もの騎兵を、単独ですっぱりと包みこむ高位広域防護結界は、敵味方共に、従来常識を、大型ハンマーで叩き割る程の衝撃だったのだ。

そして付いた二つ名は“移動城塞”だった。

しかし、最も兵士達を驚かせた“黒髪の魔術師”については、適当な二つ名が見つからず保留されたような状態になった。

候補としては“爆撃”とか“殲滅”とかだったが、その頃既に、裏で呼ばれていた“魔王”の呼び名が表に出るのは、また別の機会である。

で、本人はというと・・・

王都に戻ってから、大人気になってしまったノーマを独占して、貴族街の某男爵邸で、ふしだら極まりない生活を送っていた。

ノーマには“さっさと自分を呼ばなかった罰”として、屋敷内での衣服の着用が禁止され、常に全裸での生活を命じられたのだった。

「もう三日もこの格好だ。そろそろ私も登城するべきだと思っただが？」

「だめえ。後二日はそのまま置いて貰います」

「しかしだな。私も第十三大隊の整備計画とか、陛下や宰相閣下に御裁可を得なければなん問題がだなあ・・・」

「大丈夫だよ。陛下と宰相閣下には許可を貰ってるから」

黒髪の魔術師は、仁王立ちで抗議するノーマの、プルンと揺れる乳房と張りのあるお尻を、存分に、愛で撫で回しながら、何でもない事のように云った。

「ん？あ！・・・ん・・・何の・・・許可だ？」

「私のノーマを、私の知らないうちに、あんな危ない所に行かせたのだからだ！？って、訊いたら、お二人ともノーマに五日間の特別休暇を、直ぐに、許可してくれたよ？」

「しかし、ま・・・まさか・・・こんな・・・」

「ん？こんなことって？ああ！どうかかな？教えとこうか？」

「ああっ！・・・そこは・・・意地悪・・・あッ・・・あん！・・・

」

・・・自主規制！・・・

全く、いつもと変わらない日常だった。

(閑話) ある日のノーマ・アレハンドロ(後書き)

ずいぶん原作と雰囲気は違ってますが・・・
今回は、さみしいクルシミマス(クリスマス)を迎える私から同士の皆様へ、ささやかなプレゼントです。
ご堪能ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4835z/>

押し入れの異世界（外伝）

2011年12月24日12時09分発行